

平成 17 年 10 月 25 日
国土交通省金沢河川国道事務所

「第 6 回 手取川水系流域委員会」の審議結果（議事要旨）について

去る、平成 17 年 8 月 26 日（金）に、金沢市内で『第 6 回手取川水系流域委員会』が開催されました。会議では、事務局から『手取川水系河川整備計画（素案）』について説明があった後、各委員による審議が行われました。主な意見は次のとおりです。

出席委員：以下 16 名（8 名欠席、敬称略・専門分野別五十音順） 印は会長

氏 名	専門分野	所 属
辻本 哲郎	河川工学	名古屋大学大学院 教授
玉井 信行	河川工学	金沢大学大学院 教授
佐野 修	自然環境(魚介類)	いしかわ動物園 飼育第二課長
富樫 一次	自然環境(昆虫類)	石川県ふれあい昆虫館 館長
中村 浩二	自然環境(生態学)	金沢大学自然計測応用研究センター 教授
古池 博	自然環境(植 物)	石川県地域植物研究会 会長
中川 耕二	地下水・地質	北陸地盤工学研究会 前会長
藤 則雄	地下水・地質	金沢学院大学 名誉教授
村島 和男	農業土木	石川県立大学生物資源環境学部 教授
鹿島 博史	エネルギー	北陸電力(株)石川支店 技術部長
宮崎 光二	内水面漁業	石川県内水面漁場管理委員会 会長
池本 良子	水 質	金沢大学大学院自然科学研究科 助教授
永井 隆一	地域社会	石川県砂防協会 前会長
山崎 正夫	地域社会	手取川流域開発期成同盟会 前副会長
三田 薫子	歴史・文化・文芸・教育	作 家
米田 満	歴史・文化・文芸・教育	白山地域自然保護懇話会 座長

欠席者

中村 正博	自然環境(鳥 類)	日本野鳥の会石川県支部 事務局長
野崎 英吉	自然環境(哺乳類)	石川県環境安全部自然保護課 課長補佐
吉田 武雄	農業水利	石川県土地改良事業団体連合会 副会長
西田 耕豊	地域社会	川北町長、石川県治水協会 会長
高澤 基	報 道	北國新聞社 専務取締役
小堀 幸穂	地域経済	鶴来商工会 副会長
長谷川孝徳	歴史・文化・文芸・教育	石川県立歴史博物館 学芸専門員
平野 俊也	歴史・文化・文芸・教育	水辺の楽校街協賛会委員長、能美市立寺井図書館館長

議事内容

手取川水系河川整備計画（素案）について
今後のスケジュールについて

議事要旨

1、共通

急流河川としては書かれているが、扇状地の急流河川としては書かれていない。氾濫特性、地下水、なぜ石の河原を復元するのか、土砂動態の調査必要性等、現状説明には重要な点である。

個々の課題の目標は書かれているが、全体像が記載されておらず個別的すぎる。河川整備計画としての30年後のビジョンを記載すること。

治水、利水、環境を総合的に考えておくということを示しておく必要がある。例えば、河道内樹木については、治水への影響は詳しく書かれているが、環境への影響や代償措置をどうするかは詳しく言及されていない。両方にらんだ記載が必要。

現時点で、こういう現状、課題があり、そのためこんな調査を行うというのは判るが、では、それが解明されたらどうなるのか不明確である。その後の事も具体的に記述すべき。

具体的なメニューがかかれていないところは、その重要性すらつたわらなくなっている。「検討する」のみでなく、具体的な検討方針や配慮のしかた等、前向きな文章表現を検討すること。

2、洪水による災害の防止又は軽減に関する事項

過去の出水記録でどのような豪雨が降った実績があるのか示すこと。平均的な雨量資料だけではなく、局所的な短時間雨量も極値の記録として残す必要がある。

上流でどのくらいの雨が降ればどれくらいの流量になるのか、分かるように整理して資料として付ける必要がある。

昭和9年洪水以降、水害が発生しておらず住民に危機意識がない。しかし、まだ堤防が危険な箇所もありまだ安全ではないのだと感じた。現状の危険箇所が破堤した場合にどうなるのかを具体的に示すべきである。

30年間で手取川がきれいになり安全になる印象を受けるが、減災を図ることも必要であり、災害がなくなるわけではないことを前面に出して住民に説明すること。

川北町辰口橋の霞堤が塞がっている。霞堤を今後どうするのか明確に記載すべき。

手取川ダムの堆砂について、対策の緊急度や支障の出る事項等が具体的にわかる表現にすべきである。

大日川ダムの堆砂はどうなっているのか？手取川ダムと同じように資料を付けるべきである。

3、河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する事項

正常流量は分かり次第、あるいは暫定的でも良いから数値を決定し、パイロット的な取り組みから実施すべき。「検討中」という表現は見直すこと。土砂管理も同様である。

濁りの長期化は水生生物全体に大きな影響がある。また、その対策は非常に難しい問題であり、対策の具体的なメニューを記述できないこと理解できる。しかし、具体的な対策が記述できないために、問題の重要性が低いと誤解されてしまう可能性があるため、記述にあたっては工夫をする事。

正常流量と減水区間の問題については、影響と効果を十分検討の上、決定すべき。

素案に盛り込まなくても良いが、地下水取水実態を把握しておく必要がある。

農業用水の灌漑面積について、感覚的にこんなに多くないため、精査すること。

中流域のにごりの問題は大きい。特に、十八河原に昔はカマキリ、カジカがいたが今はいない。水生昆虫も減っている。濁りの対策を早く実施すべきである。

SSはアユへの影響が大きい。上流の崩壊地での火山灰流出防止の対策を積極的にできないか

4、河川環境の整備と保全に関する事項

災害時の対応には、知識と情報と原始的な勘が必要。山男など現場を知る人の教を請う等、川における人間教育が必要、重要であり、ソフト対策として盛り込むこと。

人材のネットワークは重要である。素案でも人材育成や意識啓発に触れているが伝わってこない。地元の知恵、知識を伝承させる河川に沿ったネットワークが必要であり、表現を工夫すること。

河川整備計画には、風景の保全という観点も必要である。

天狗橋左岸上流の二ヶ用水の呑み口は歴史的に重要であるが、周辺は荒れており道路も使えない。呑み口から手取川を見た景観も良い所であり、学習の場として整備活用できないか検討すべき。

河畔林について述べられていない。河川環境としても密接に関連がある。破堤した場合の減災の効果もある。方向性としての言及のみでも検討すべき。

環境は堤防の中だけでなく、周辺環境とも密接に関連している。具体性は難しいが、河川環境の管理の方向性は明記すべき

トミヨの保全の意義や水辺の国調の成果をどう使っていくかなど、書き方が足りない部分は整理の上、記載すること。

石川県内で最大のコアジサシ繁殖地との表記があるが、よりよい繁殖地があれば鳥類は移動するものである。ダムの完成後洪水の減少により砂地が減少したものであり、石の河原を保全・復元しても30年に渡り可能なのか？

河床の掘削にあたっては、漁業関係者の意見を聞くなど、アユの産卵場所の保全について考慮すること。

アユの産卵に関しては、産卵時期の10月をはずせば河床掘削は問題ない。

台風の翌年は、洪水で河床礫の表面の泥分が洗い流されるため、アユが豊漁である。四万十川では、アユの産卵のため、9月に河床をブルでかき回している。

サクラマスが合口堰堤下流まできている。30年、魚道改築を待っていると途絶えてしまう危険性がある。

以 上

お問合せ先

国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所

調査第一課長 二 俣（ふたまた）

TEL 076-264-8800(代) (内線)351